

介護老人福祉施設における介護職者の フットケア教育プログラムの有効性の検討

永井さつき

愛媛県立医療技術大学紀要 第18巻 第1号抜粋

2021年12月

介護老人福祉施設における介護職者の フットケア教育プログラムの有効性の検討

永井さつき*

Investigation on Effects of Foot Care Education Programs for Care Providers in Aged Care Facility

Satsuki NAGAI

Keywords：フットケア，教育プログラム，有効性検討，高齢者施設

序 文

高齢者の足は、加齢や慢性疾患、長年の生活習慣の影響を受け、何らかの問題を抱えていることが多い。また、脆弱な足は、立位や歩行において身体のバランス調整や蹴り出しが困難となり、安全性や移動のしやすさに障害を及ぼす¹⁾と言われている。そのため高齢者の転倒予防として、足の機能維持・向上を目的としたフットケアは、重要なケアであると言える。加えて厚生労働省が、2003年から介護予防事業に「足指・爪のケアに関する事業（フットケア）」を盛り込んだことでフットケアの重要性が認識されるようになった。そして2017年には経済産業省が、高齢者介護施設に入居する高齢者の巻き爪や皮膚乾燥のケアなどを介護職者が行うことについて、医師が治療の必要ないと判断すれば医師法には違反しないとする見解を発表した。これにより、介護職者が単独でフットケアを行うことが可能となった。そのため、高齢者施設でフットケアに携わる介護職者にもフットケア実践のための確かな技術が求められるようになった。

介護老人福祉施設でのフットケアに関して、高木らは、業務体制の構築が不十分であるため爪切りケア時間の確保が困難であり、日常ケアの中でも爪切りの優先順位が低く捉えられている可能性がある²⁾ことを、堀田らは、介護老人福祉施設は看護職者の配置人数が少なく医師も常駐しないため、職員の教育体制は十分に整備されていない可能性がある³⁾ことを指摘している。このように介護老人福祉施設においては介護職者のフットケアへの意識は低く、技術向上の機会も少ないことが推測さ

れる。

また、介護老人福祉施設の介護職者は無資格であっても従事することが可能なため、永松は、介護職者は自分のケアが適切であるのか自信が持てない中、日々介護業務に従事している可能性が高い⁴⁾ことを指摘している。したがって、池永が指摘するように、フットケア技術向上のためには基本知識を学び、観察力やアセスメント力を習得することが重要⁵⁾となり、西田の提言する、基礎的なことから手厚く実施する教育⁶⁾が必要となる。

以上のことから、介護老人福祉施設におけるフットケア技術の向上に関して、業務体制の構築が不十分であることに加えて、教育体制も不十分であることが課題と言える。ケア技術向上のためには介護老人福祉施設でフットケアに携わる全介護職者のケア教育・技術支援が必須であり、支援することによって介護老人福祉施設でのケア技術の向上に貢献できると考える。

そこで本研究では、フットケアに焦点をあて介護職者のフットケア教育プログラム（以下、FC教育プログラム）を考案・実施することで、その有効性を検討し、介護老人福祉施設における介護職者の更なるフットケア技術向上へつなげることを目的とした。

用語の定義

フットケア：足浴・角質削り・爪切り・保湿を含む皮膚のケアと足の皮膚・爪の観察、異常の早期発見と対処（必要時には医療に繋ぐこと）をさす。

介護職者：介護老人福祉施設において、日常生活支援

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

表1 介護職者のフットケア教育プログラム

	対象	ねらい	目標	内容
プログラム① 集合研修 (約120分)	受講希望者 全員	・フットケアに関する知識の伝達	・フットケアの重要性を理解できる	・フットケアの重要性、足の見方、皮膚と爪のケア、足の運動について講義と演習を実施する。 ・受講者全員に対し研修会評価のためのアンケート実施
プログラム② 第1回 グループワーク	研究対象者 全員	・各自のフットケア技術のリフレクション ・フットケア技術向上に対するモチベーションアップ	・自己のフットケア技術を振り返り、技術向上への意欲を高めることができる	・研究対象者全員がプログラム①を受けて、自分が出ていることのないことを出し合い確認して、各自の課題を明らかにする。これにより技術向上への意欲を高める。
プログラム③ 技術指導	研究対象者 個別	・対象に合わせたフットケア技術の習得	・一連のフットケア（観察・保清・角質ケア・爪切り・保湿）が実施できる	・指導を始める前にチェックリストを用いて個別に技術評価を行う。 ・研究者が、研究対象者のケア場面に同行しその場で技術指導する。 ・技術評価のチェックリストは研究対象者個々に渡しておき、研究対象者はそれぞれチェックリストやDVDを見て自己学習を行う
プログラム④ 第2回 グループワーク	研究対象者 全員	・フットケア技術向上へのモチベーション維持	・フットケア技術の習得状況、DVD自己学習の実施状況について意見交換できる	・研究対象者全員がプログラム③を受けてまた、フットケア技術の習得状況、DVD自己学習の実施状況について意見交換する。 ・まだ十分でない技術について確認し合うことで、技術評価に向けて意欲を高める。
プログラム⑤ 技術評価	研究対象者 個別	・フットケア技術の習得度の認識	・自己のフットケア技術の習得度を知ることができる	・研究者が、研究対象者のケア場面に同行し、チェックリストを用いて個別に技術評価を行う。
プログラム⑥ 第3回 グループワーク	研究対象者 全員	・評価結果のフィードバック	・フットケアの継続に向けて自己研鑽できる	・研究対象者全員に技術評価のフィードバックを行い、自己のフットケア技術やこのプログラムについて意見交換する。 ・プログラムの実施後評価のためのアンケート

業務（介護業務）に携わる全ての者で、無資格介護職員、介護福祉士、准看護師、看護師を含む。

方 法

1. 介護職者のフットケア教育プログラムの概要（表1）

F C教育プログラムは、集合研修1回、技術指導1回、技術評価1回とそれぞれの終了後に実施する3回のグループワークで構成され、研究者の介入により約6カ月間で実施される。まずプログラム①では、フットケアに関する知識を教授するための研究者が講師となり集合研修を行う。プログラム②の1回目グループワークでは、参加者が個々に今まで実践してきたフットケアを振り返って自己の課題を明確にし、フットケア技術向上に対する意欲向上を図る。プログラム③は、全て個別に実施するプログラムである。フットケア技術チェックリスト（以下チェックリスト）を用いて研究者が技術指導前の評価を実施する。その後、研究者が技術指導を行い、フットケアのDVD視聴や指導前チェックリストで、得点の低い技術項目を確認しながらの自主練習を促す。プログラム④は、プログラム③の技術指導終了の約1ヶ月後に2回目グループワークを実施する。ここでは、他者と自己学習の実施状況や技術習得状況について意見交換することで意欲の維持・向上を図る。プログラム⑤では、プログラム③で記入したチェックリストを用いて、プログラム参加者に同行し、実際のフットケアの技術評価を研究者が行う。プログラム⑥は、プログラム⑤の評

価結果をフィードバックすると同時に、プログラム参加を振り返るためのグループワークを実施する。以上6つのプログラムで本研究のF C教育プログラムは構成されている。

F C教育プログラムで使用するチェックリストは、20項目で構成され、「よくできた」～「できなかった」の5段階で評価し点数化する。得点が高いほど技術力が高いことを示す。なお、作成には、足のケアの一連の流れ（日本フットケア学会, 2013）⁷⁾、シャボンラッピングの注意点（山口, 2016）⁸⁾、足浴・フットケアの留意点（柳井田, 2016）⁹⁾を参考にした。

2. 研究対象者

A県内の介護老人福祉施設2施設に勤務する介護職者45名のうち、同意を得られた17名である。

3. データ収集方法

フットケア技術の向上の検証は、技術指導前後に実施する2回のチェックリスト（プログラム③と⑤）の得点をデータとした。

また、F C教育プログラムの効果及び評価を得るために、無記名自記式質問紙調査をプログラム終了時に実施した。調査内容は、F C教育プログラム参加に対する意見・感想を自由記述にて求めた。

4. 分析方法

フットケア技術向上の検証は、技術指導前後のチェックリストの得点差に対応のある t 検定を実施した。統計解析にはMicrosoft® Excel® 2019の分析ツールを用い、有意水準は5%とした。

質問紙調査では、本プログラム参加に対する意見・感想の自由記述からFC教育プログラムの効果及び評価に関する記述部分を抽出し、データとした。抽出したデータは、類似性に基づきカテゴリー化した。なお、分析の真実性は質的研究者のスーパーバイズにより確保した。

5. 倫理的配慮

愛媛県立医療技術大学研究倫理委員会の承認後（H30-019）、研究協力施設の承認を得て実施した。対象者には研究の主旨、目的・方法、研究協力の任意性と撤回の自由、協力しなくても不利益は生じないこと、プライバシーの保護、データの保管と管理及び研究終了後のデータの破棄、結果の公表について研究者が文書を用いて説明し、同意書への署名にて同意を得た。

結 果

1. 対象者の属性（表2）

研究対象者は男性4名、女性13名であった。平均年齢は46.2歳であった。資格は、無資格介護職員2名、介護福祉士10名、准看護師3名、看護師2名であった。保健・医療・福祉分野での平均経験年数は13.9年であった。

表2 対象者の属性

		n=17
性別	男性	4 (23.5%)
	女性	13 (76.5%)
年齢	20～29歳	2 (11.8%)
	30～39歳	2 (11.8%)
	40～49歳	3 (17.6%)
	50～59歳	10 (58.8%)
	資格	
	看護師	2 (11.8%)
	准看護師	3 (17.6%)
	介護福祉士	10 (58.8%)
	無資格介護職員	2 (11.8%)
保健・医療・福祉分野での経験年数	0～5年	5 (29.4%)
	6～10年	5 (29.4%)
	11～15年	1 (5.9%)
	16～20年	1 (5.9%)
	21～25年	1 (5.9%)
	26～30年	3 (17.6%)
	31年以上	1 (5.9%)

2. FC教育プログラム実施前後の技術評価点の比較（表3）

フットケア技術の評価となるチェックリスト全20項目の合計得点の平均値は、指導前68.5点、指導後88.5点であった。また、チェックリスト20項目のうち1点以上の上昇項目は、“プライバシーの保護”“足の下に防水シート・バスタオルを敷く”“袋から出して水分を取りバスタオルを巻く（保温する）”“道具に合わせて相手との向きをとる（ニッパー or 爪切り）”“スクエアオフに爪をきる”“ヤスリをかける”など11項目であった。

3. FC教育プログラムの効果及び評価（表4）

質問紙において、FC教育プログラムの効果及び評価に関する記述は158件であった。それらを類似性に基づき分析した結果、【フットケアの知識・技術が向上した】【教育プログラムは学びの機会となり、フットケア意欲の向上につながった】【職員同士の交流が増えた】【高齢者の要望や反応を注視できるようになった】【日頃からのフットケアの自己研鑽と準備性が高まった】【他職員にもフットケアへの興味・関心が波及した】【他職員は忙しくなり、実施しようとしなかった】の7カテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーは【 】, 代表的な記述は文頭を1文字下げ「 」内に斜体で示す。

【フットケアの知識・技術が向上した】

このカテゴリーは、研修を受け、爪の切り方やヤスリのかけ方などの具体的な技術や確実な技術提供ができることを目標に練習を重ね、技術が向上したことのみにならず足に関する知識を学び、足を観察することの重要性や、フットケアの必要性を理解したことを自身の変化として認識していることを示している。

「自分の技術の幅が広がったと思う」

「高齢者の爪を含む足の状態は様々であることが分かった」

「足を観ることで身体の変化に気づくことが出来ると学んだ」

「状況をアセスメントし、トラブルの予防を考えて実践できるようになった」

【教育プログラムは学びの機会となり、フットケア意欲の向上につながった】

このカテゴリーは、日頃の業務では経験できない個別指導や評価を受けたことや、グループワークでの意見交換などから多くの気づきや学びがあり、フットケアを続ける意欲向上に繋がったことを示している。

「個別の指導・評価を受けられたのは良かった」

「グループワークでは他者の意見から多くを学んだ」

【職員同士の交流が増えた】

このカテゴリーは、介護士・介護員が看護師へのケ

表3 フットケア教育プログラム実施前後の技術得点の変化

技術評価項目	指導前 平均値±SD	指導後 平均値±SD	
全項目の合計得点	68.5 ±7.4	88.5 ±6.3	***
必要物品を準備できる	3.6 ±0.8	4.4 ±0.5	**
患者に移動する目的と方法を説明し同意を確認する	4.1 ±1.1	4.8 ±0.4	*
体位を整える（安楽、保温等に注意）	3.3 ±0.7	4.2 ±0.7	**
プライバシーの確保（カーテン・掛物）	2.5 ±0.8	4.4 ±0.6	***
感染予防（手袋、エプロンの着用）	4.1 ±0.9	4.4 ±1.0	
足を観察する	3.1 ±0.9	4.3 ±0.9	**
泡をつくる（泡の硬さ・量）	3.6 ±0.8	4.6 ±0.5	***
足の下に防水シート・バスタオルを敷く	3.2 ±0.5	4.1 ±0.9	**
泡の入ったナイロン袋に足をつける	3.6 ±0.6	4.6 ±0.8	**
袋の上から片方ずつ指の間を洗う	3.8 ±0.6	4.6 ±0.6	**
片方の足の泡を拭ってナイロン袋の中ですすぎ湯をかける	3.0 ±0.7	3.8 ±0.8	*
袋から出して水分を取りバスタオルを巻く（保温する）	3.6 ±0.6	4.6 ±0.6	***
胼胝(たこ)・鶏眼(うおのめ)などの処置の必要性の判断	3.5 ±0.8	4.5 ±0.5	***
ヤスリを使って硬く黄色く変色した部分を削る	3.3 ±0.7	4.2 ±0.7	**
道具に合わせて相手との向きをとる（ニツパーor爪切り）	2.9 ±0.8	4.2 ±0.8	**
スクエアオフに爪をきる	2.9 ±0.9	4.4 ±0.8	***
ヤスリをかける	3.1 ±0.9	4.3 ±0.6	**
1 F T U手に取り適切な面積に両手を使って足に塗布する	3.7 ±0.7	4.7 ±0.6	***
ケア中の対象への適切な声かけと観察	3.7 ±0.8	4.7 ±0.5	***
ケア終了時のねぎらいの声かけと体位を元に戻す	3.7 ±0.6	4.6 ±0.6	***

t検定 *: p < .05 **: p < .01 ***: p < .001

ア報告・相談やFC教育プログラム参加者間で技術を教え合う、励まし合うなど今まで交流のなかった職員同士が、FC教育プログラム参加をきっかけに、コミュニケーションをとるなど施設内で職員同士の交流が増えたことを示している。

「看護師への報告・相談が増えた」

「対象者同士が教え合ったり、励まし合ったりして交流できた」

「今まで交流のなかった職員ともコミュニケーションがとれた」

【高齢者の要望や反応を注視できるようになった】

このカテゴリーは、フットケアを受けた高齢者から「気持ちよかった、きれいになった」という言葉や表情や、高齢者からのフットケアの要望など高齢者の反応を注視するようになったことを示している。

「気持ちよかった、きれいになったなどの反応があった」

「足がきれいになり表情も良くなった」

「高齢者からの爪切りやフットケアの要望が多くなった」

【日頃からのフットケアの自己研鑽と準備性が高まった】

このカテゴリーは、フットケア技術の向上のために

表4 フットケア教育プログラムについての意見・感想

カテゴリー	代表的な記述
フットケアの知識・技術が向上した	<ul style="list-style-type: none"> • 自分の技術の幅が広がったと思う • 高齢者の爪を含む足の状態は様々であることが分かった • 足を観ることで身体の変化に気づくことが出来ると学んだ • 状況をアセスメントし、トラブルの予防を考えて実践できるようになった
教育プログラムは学びの機会となり、フットケア意欲の向上につながった	<ul style="list-style-type: none"> • 個別の指導・評価を受けられたのは良かった • グループワークでは他者の意見から多くを学んだ
職員同士の交流が増えた	<ul style="list-style-type: none"> • 看護師への報告・相談が増えた • 対象者同士が教え合ったり、励まし合ったりして交流できた • 今まで交流のなかった職員ともコミュニケーションがとれた
高齢者の要望や反応を注視できるようになった	<ul style="list-style-type: none"> • 気持ちよかった、きれいになったなどの反応があった • 足がきれいになり表情も良くなった • 高齢者からの爪切りやフットケアの要望が多くなった
日頃からのフットケアの自己研鑽と準備性が高まった	<ul style="list-style-type: none"> • 爪切り、足浴は、工夫と練習を重ねできるようになった • フットケアの一部でも日常ケアの中に取り込んで実施する • 気づいたら実施できるよう道具をすぐ使える場所に揃えておく
他職員にもフットケアへの興味・関心が波及した	<ul style="list-style-type: none"> • 他職員もフットケアに興味を持つようになった • フットケア時に声をかけたり、質問したりする • フットケアの効果を示し、良さを伝える
他職員は忙しくなり、実施しようとしにくい	<ul style="list-style-type: none"> • 周囲の忙しさが増した • 周囲の職員は見ていても実施しようとはしない

日々の業務の中にフットケアの一部分を取り入れるなど工夫をし、自己技術練習を重ねるようになったことや、フットケアが必要と感じた時は、即時にフットケアが実施できるように道具を準備しておくようになった、というフットケアに対する準備性の高まりを示している。

「爪切り、足浴は、工夫と練習を重ねできるようになった」

「フットケアの一部でも日常ケアの中に取り込んで実施する」

「気づいたら実施できるよう道具をすぐ使える場所に揃えておく」

【他職員にもフットケアへの興味・関心が波及した】

このカテゴリーは、FC教育プログラムに参加していない職員が、フットケアを見て声をかけたり質問をしたりと興味を持つようになったことから、多くの職員にフットケアへの興味・関心が広まったことを示している。

「他職員もフットケアに興味を持つようになった」

「フットケア時に声をかけたり、質問したりする」

「フットケアの効果を示し、良さを伝える」

【他職員は忙しくなり、実施しようとしにくい】

このカテゴリーは、フットケアを実施することで職場が多忙になり、FC教育プログラムに参加していない周囲の職員は、フットケアを実施しようとしにくい状況を示している。

「周囲の忙しさが増した」

「周囲の職員は見ていても実施しようとはしない」

考 察

FC教育プログラムに参加したことで、フットケア技術が向上したことは、技術指導後のチェックリストの得点の上昇からわかる。更に【フットケアの知識・技術が向上した】や【高齢者の要望や反応を注視できるようになった】のカテゴリーからもフットケア技術が向上した

と言える。このフットケア技術の向上は、本研究では、研究者が現場で個別指導・個別評価を行ったことや、研究対象者が自己学習できるようDVDを準備し練習時間も十分に設定していたことなどから必然であるともいえるが、本研究で用いたFC教育プログラムの有効性を示していると考えられる。

また、【教育プログラムは学びの機会となり、フットケア意欲の向上につながった】【日頃からのフットケアの自己研鑽と準備性が高まった】という結果は、単に技術の向上にとどまらず、ケアの質向上につながるというケア提供者の内面へのよい刺激があったことを示している。習田は、看護技術は技術として単独で存在するものではなく、知識・技術・態度が内包されていると述べている¹⁰⁾。つまり本プログラムによる知識・技術の向上は、態度にも大きく反映しているのである。高度なケア技術とケア提供者の態度が重なり合うことによって、より質の高いケアが提供できる。これらの結果からも本研究で用いたFC教育プログラムは有効であるといえる。

加えて、【職員同士の交流が増えた】【他職員にもフットケアへの興味・関心が波及した】という結果が得られた。これらのことは、本研究プログラムの副産物としての有効性であると考えられる。本プログラムに設定した3回のグループワークでは、研究対象者それぞれが自身のフットケア技術を振り返ったり、工夫点を教え合ったりできたことで、「(グループワークでは)他者の意見から多くを学(んだ)」び、更に【職員同士の交流が増えた】という効果を生んだと考えられる。また、研究者が現場で業務時間中に個別指導・個別評価を行ったことで、その様子が多くの職員の目に触れ【他職員にもフットケアへの興味・関心が波及した】という結果に繋がったといえる。

しかし、FC教育プログラムに参加しフットケアを実施することで多忙になったり、周囲の職員がフットケアを実施しようとしなかったりと【他職員は忙しくなり、実施しようとしな】ことも分かった。藤田らは、介護の現場は人材不足が顕在化しており、介護施設職員は身体介護の仕事だけでなく事務仕事も増加しており、煩雑な業務に限られた人員・時間で対応を迫られている¹¹⁾と指摘している。フットケアを実施する間は日常業務を他の職員がすることになり、周囲の負担は結果的に増加する。そのため、フットケアを波及させていくには、施設全体で組織的に方策を考える必要があるだろう。また内田は、高齢者施設において介護職員が充実感を持てるよう、職員の考えや主体的な行動を大事にし、職員同士で考えや思いを共有できる介護体制の必要性¹²⁾に言及している。幸い参加者の中には「フットケアの一部でも日常ケアの中に取り込んで実施する」「フットケアの効果を示し、良さを伝える」といった意見がある。こうした意

見を尊重し、まずは組織内で職種を越えた意思疎通を図ることが必要となろう。そして更に、組織内でお互いが学び合う・教育し合うことが可能となるような体制作りが課題であると考えられる。

以上のことより本プログラムは、介護職者のフットケア技術の向上に有効であったと言える。加えて、フットケアに対する意識の変化もたらずという効果も得られた。今後、FC教育プログラムの活用により全職員がフットケア技術向上に向けて学び合う組織づくりが求められる。

引用文献

- 1) 池田清子 (2013) : 高齢者におけるフットケアの重要性. はじめよう! フットケア 第3版. 日本フットケア学会 編, 18-22, 日本看護協会出版会
- 2) 高木真心美, 會田信子, 杉浦伸一, 他 (2012) : 認知症高齢者の足趾の爪切り実施時における介護老人福祉施設スタッフの困難と工夫に関する基礎的研究. 日本看護医療学会雑誌, 14(2), 35-45.
- 3) 堀田将士, 古川直美, 星野純子, 他 (2016) : 特別養護老人ホームに勤務する看護職に対する人材育成の現状と課題. 岐阜県立看護大学紀要, 16(1), 121-127.
- 4) 永松美菜子, 村山浩一郎 (2016) : 特別養護老人ホームにおける介護職員への職場内集合研修の現状と課題 —北九州市における特別養護老人ホーム(介護老人福祉施設)を中心に—. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 25(1), 23-41.
- 5) 池永恵子 (2014) : 【チーム連携で効果を上げる!在宅・施設のフットケア】〈報告3〉マザーライク訪問看護ステーション(神奈川県横浜市)介護職に期待される予防的フットケアとその効果. コミュニティケア, 16(3), 30-33.
- 6) 西田寿代 (2014) : 在宅や高齢者介護施設のフットケアはチームで取り組もう. コミュニティケア, 16(3), 10-15.
- 7) 前掲書 1) 132-149.
- 8) 山口晴美 (2016) : ナースが行う 実践!フットケア 実技速習セミナー, 32-48 92-94, メディカ出版
- 9) 柳井田恭子, 谷口好美 (2016) : 足浴・フットケア, 根拠と事故防止からみた老年看護技術 第2版, 248-258, 医学書院
- 10) 習田明裕 (2017) : 看護技術とは何か. ナーシンググラフィカ基礎看護③基礎看護技術. 志自岐康子, 松尾ミヨ子, 金壽子, 他編, メディカ出版, 14-16.
- 11) 藤田益伸, 名定慎也, 田中洋三 (2019) : 介護施設職員の心理的困難の構造 自由記述の分析をもと

- に. ホスピスケアと在宅ケア, 27(3), 254-260.
- 12) 内田和宏 (2020): 【事業の維持と拡大 職員を集める効果的な方法】介護職員を取り巻く現状と離職率が低い高齢者ケア施設の実践例 (解説/特集). コミュニティケア, 22(14), 28-32.
-

要 旨

本研究では, 介護老人福祉施設における介護職者のフットケア技術向上のために, 教育プログラムを考案・実施し, その有効性を検討した。介護職者17名に実施した20項目のチェックリストによる指導前後の技術評価では, 19項目において指導後の得点が有意に上昇した。また自記式質問紙の自由記述からは, 【フットケアの知識・技術が向上した】【教育プログラムは学びの機会となり, フットケア意欲の向上につながった】【職員同士の交流が増えた】【高齢者の要望や反応を注視できるようになった】【日頃からのフットケアの自己研鑽と準備性が高まった】【他職員にもフットケアへの興味・関心が波及した】【他職員は忙しくなり, 実施しようとしなない】の7カテゴリーが抽出された。本プログラムは, 介護職者のフットケア技術の向上に有効であり, フットケアに対する意識の変化をもたらした。この結果を踏まえ, 全職員がフットケア技術向上に向けて学び合う組織づくりが求められる。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり, ご協力いただいた介護老人福祉施設の施設長, 研究対象者をはじめとする職員の皆様に心より感謝申し上げます。

なお, 本研究は, 平成30年度愛媛県立医療技術大学教育・研究助成費を受け実施した。また, 第39回日本看護科学学会学術集会で発表した内容に加筆修正したものである。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。